

# 『枕草子』類聚的章段の情報構造

藤原浩史

## 1. はじめに

『枕草子』の「もの」型章段および「は」型章段は、章段主題のもとに事例・事物が名詞述語文として列挙される文章となっている。この文章様式について、藤原(2019)(2020)において、文タイプの分析から次のようなしくみがあることを指摘した。

- ① 名詞述語文の連鎖によって、命題を形成する。  
文字列上には、それは明示されず、コノテーションとして提示される。
- ② 形容詞述語文・動詞述語文・「なり」型名詞述語文は注釈的成分である。これは、読者に命題・論理の形成をうながす著者の見解である。

多くの文章は、著者から読者への一方通行のデノテーションであるのに対し、『枕草子』の類聚的章段は類例を見ない文章構造である。なお、この①②が成立するためには、著者と読者の間に対話の場が想定されていることが必要である。また、事例からコノテーションとして意味が形成されるためには、解釈の根拠となる文脈が必要である。類聚的章段はいずれも定型性をもっているが、それが場と文脈を構成する基本となる。

類聚的章段に類似する構造をもつ文章は散文には見られず、わずかに字書の様式に類型を求めることができる。ただし、字書は文字・単語の解説であり、清少納言がその様式をもって類聚的章段において何を行おうとしたのか、論考の必要がある。本稿では、類聚的章段、「もの」型章段と「は」型章段の共通点と相違点を考察することから出発し、コノテーションの生成を含む、類聚的章段の情報構造を明らかにすることを目的とする。

調査資料には、新編日本古典全集を用い、文の述語タイプにより、以下の通り、分類をほどこす。用例は、文単位の分かち書きに加工して示す。

- ◎ 章段主題 : 章段冒頭の名詞句。
- 名詞述語文 : 名詞を述語とする文。
- 名詞句述語文 : 名詞句(用言の連体形)を述語とする文。
- ◇ 「なり」型名詞述語文 : 文末に「なり」を付加する名詞述語文。
- △ 形容詞述語文 : 形容詞・形容動詞を述語とする文。
- ▲ 省略型形容詞述語文 : 述語の形容詞・形容動詞が省略されている文。
- 動詞述語文 : 動詞を述語とする文。
- 省略型動詞述語文 : 述語の動詞が省略されている文。

本稿では、類聚的章段の基本構造(上記①)を対象とするので、主として、章段主題(◎)と名詞述語文(○)・名詞句述語文(●)の関係性を論ずる。なお、以下の論考では、名詞述語文と名詞句述語文をあわせて「名詞述語文」と総称する。

## 2. 「もの」型章段と「は」型章段の章段主題

### 2.1. 章段主題

「もの」型章段の主題は、かならず「形容詞句+もの」で提示され、「は」など主題であることを表示する助詞をとまなわない。一方「は」型章段は、「名詞句+は」で表示され、「は」のない主題提示はない。ともに、文末に助詞・助動詞をとまなわない名詞述語と呼応して文を形成することは共通する。この「は」の有無が示すものは何か、第一の問題としてこの論考を行う。

2つの名詞句だけで構成される名詞述語文は、一般にそれだけでは文の意味が確定できない性質がある。たとえば、「ぼくはウナギだ」という文は、単独では多義的である。食堂で客と店員という対話の場があり、複数の客がいて、複数の料理がある、という条件下でのみ、注文として意味をもつ。係助詞「は」は、複数の客から「ぼく」を卓立する機能を有する。それが不在場合には、卓立する意志がとくにない場合である。その違いが、「もの」型章段と「は」型章段に見られるかどうか、その確定が必要であろう。その章段を読者にどのように読ませるべきか、清少納言の意図がそこにあるはずである。

『枕草子』の章段主題には、「は」型・「もの」型だけでなく、「こそ」型ではじまる18章段がある。ただし、この形式ではじまる章段は、「は」型・「もの」型とは文章構成が対照的である。

- (1) □ 主殿司こそ、なほをかききものはあれ。
- △ 下女の際は、さばかりうらやましきものはなし。

- ◇ よき人にもせさせまほしきわざなめり。
  - △ 若くかたちよからむが、なりなどよくてあらむは、ましてよからむかし。
  - △ すこし老いて、物の例知り、面なきさまなるも、いとつきづきしく目やすし。
  - 主殿司の、顔愛敬づきたらむ一人持たりて、装束時にしたがひ、裳も、唐衣など、今めかしくて、ありかせばやとこそおぼゆれ。
- (45段 主殿司こそ)

形容詞述語文(△)・動詞述語文(□)・「なり」型名詞述語文(◇)の連鎖で文章が構成されており、名詞述語文(○)は使用されない。「は」型・「もの」型においては注釈的成分となる文タイプのみで構成されているのである。

(1)では、「主殿司」に関する清少納言の見解でが述べられており、これは「こそ」型で章段主題を形成する18章段に共通する特徴となる。一方、「は」型章段・「もの」型章段においては、これを副次的な要素とし、主たる記述は非「なり」型の名詞述語文による。「○○は」「○○なるもの」という主題提示は、その記述方式を指定する様式であり、読者に対する伝達態度の表示であるはずである。それは「こそ」型で実現される著者の意見表明とは異なるはずである。

## 2.2. 主題の内包

「は」型章段の主題は次の(2)(3)のように、事物の一般概念の提示である。(2)では「関」に対して「逢坂」以下、関所の固有名が並ぶ。(3)では、権官の国司に対して、その担当する国名が並ぶ。ともに、章段主題の概念に内包される事物名が配列されており、主題と述語は集合とその要素の関係になる。

- (2) ◎ 関は
- 逢坂。
  - 須磨の関。
  - 鈴鹿の関。
  - くきたの関。
  - 白河の関。
  - 衣の関。〈以下略〉

(107段 関は)

- (3) ◎ 権守は
- 甲斐。

(40)

- 越後。
- 筑後。
- 阿波。

(166段 権守は)

要素同士は互いに対等であるから、構造的には並列関係に見える。しかし、(2)では京から近い順<sup>(1)</sup>に配列されており、順序づけられた記述である。また(3)では、選択された4国は、いずれも令で定めるところの上国であり、かつ、それぞれの属する道の最遠の地が選択されている。

前者には、京からの距離がコントロールされており、後者には、受領にとつての社会的地位と京との距離が計算されている。その規則は、文字列上に表されていないが、事物に設定されたイメージと配列から、読者が構築すべき情報である。「は」型章段の文章はこのようにコノテーションを指向するが、卓立された要素から素性を抽出し、集合概念に潜在する特定の素性を導くものである。

### 2.3. 主題の外延

これに対し「もの」型章段では、(4)(5)のように、ある素性を章段主題で提示する。そして、その素性を有する事物・事例を述語として配列する。章段主題を基準にすると、その外延の論述である。

- (4) ◎ おそろしげなるもの
- 橡のかさ。
  - 焼けたるところ。
  - 水茨。
  - 菱。
  - 髪おほかる男の洗ひて乾すほど。

(141段 おそろしげなるもの)

- (5) ◎ 清しと見ゆるもの
- 土器。
  - あたらしき鏡。
  - 暈にさす薦。
  - 水を物に入る透影。

(142段 清しと見ゆるもの)

(4)では、「橡のかさ」が第一に提示されている。しかし、クヌギの団栗は確かにトゲトゲしているが、「おそろし」というほどのものではない。主題の素

性を内包するが、かならずしも代表的事物ではない。(5)でも「清しと見ゆるもの」として第一に「土器」を提示するが、むしろ、「清し」という素性をもたない事物のように感ずる。しかしながら、「あたらしき鏡」以下仏事に関わる事物<sup>(2)</sup>であることがわかると、「清浄さ」を生み出すものは信仰であることがわかる。ある素性を有する事物・事例には、いかなる原理がはたらくものか、読者の意識をそこに導く文章構造をとる。すなわち、ある共通素性をもつ要素が形成する集合概念に導く文章なのである。

「もの」型章段もコノテーション指向の文章なのであるが、「は」型章段とは対極の指向性をもつ構造となっている。

#### 2.4. 章段主題の提示

『枕草子』においては、冒頭の主題提示において、その章段の情報生成に関する指向性が示される。「は」型章段も「もの」型章段も、ともに、コノテーション指向の文章である。「は」型の場合には主題の内包を指定する。そして、「もの」型の場合には、外延を指定するわけである。

これ以外の場合、たとえば、「もの」と「は」が共存する「ものは」型で章段をはじめめる場合には、この指定には入らない。

- (6) ◎ ふと心おとりとかするものは  
 △ 男も女もことばの文字いやしう使ひたるこそよろづの事よりまさりてわろけれ。  
 ただ文字一つに、あやしう、あてにもいやしうもなるは、いかなるにかあらむ。  
 さるは、かう思ふ人、ことにすぐれてもあらじかし。  
 いづれをよしあしと知るにかは。  
 されど、人をば知らじ、ただ心地にさおぼゆるなり。〈以下略〉

(186段 ふと心おとりとかするものは)

これは、「こそ」型と同じく、名詞述語文ではなく、形容詞述語文・動詞述語文の連鎖で文章が構成される。これらは、著者に固有の情報を読者に提示するものであり、デノテーションを指向する文章である。

つまり、「は」型の章段主題提示は、以下集合の内包する要素を列挙することの指定であり、そこから素性に関する情報を生成することを指定する。「もの」型の章段主題提示は、その素性の外延となる事例を列挙することの指定であり、そこから集合に関する情報を生成することを指定するものである、と限定しうるのである。コノテーションの形成には、読者との間に共有の情報があ

(42)

り、共有する場が必要である。ゆえに、対話的な構造を必要とし、一定の手順で事例・事物を提示するのである。著者・読者の双方に既知の事物・事例を指示することで、情報の生成をうながすものである。

### 3. 「は」型章段の情報構造

#### 3.1. 択一構造

「は」型章段では、章段主題はある集合的概念である。そして、その集合が内包する要素を述語として提示する。それは多くの要素の中から選択され、卓立されたものである。その選択は、清少納言の判断の結果であり、そのメッセージがこめられるはずである。特に、章段中にただ1つ指定された名詞述語は、その集合の代表性をもつものであるようにも思われる。「は」型の95章段のうち、15章段が1つの事例提示によって構成されているが、まず、これを確認してみよう。

- (7) ◎ 読経は  
○ 不断経。

(159段 読経は)

- (8) ◎ 猫は、  
● 上のかぎり黒くて、腹いと白き。

(50段 猫は)

(7)「読経」と指定しながら、清少納言が提示するのは、特定の経典ではなく、間断なく読みつづける「不断経」という方法である。なにが読まれているかではなく、どのように読まれたか、そちらに価値があるようにも受け取れる。また、(8)のように「猫」について、多様である猫の毛色から黒白の猫を指定するが、それが必ずしも猫を代表するものではなかろう。ただし、迷彩のように風景に埋没しない明確なコントラストを見せることで、ペットとしての存在感が明確になるようにも受け取れる。

次の(9)にいたっては、「日は」と指定しながら、「入日」を指定する。日没後の見えない太陽は、物理的には「日」の代表とは言えないだろう。

- (9) ◎ 日は  
○ 入日。  
△ 入り果てぬる山の端に、光なほとまりて、あかう見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきわたりたる、いとあはれなり。

(234 段 日は)

太陽はその光をもって特徴とするものであるが、強烈であるがゆえに、それを直視して鑑賞することはできない。しかし、日没後もその光は見え、空を赤く、雲を黄色く染めることによって、日の光を十分に見ることができ。それが「いとあはれなり」すばらしいと、清少納言は注釈する。これによって、この章段の意図が、単に太陽の趣ではなく、「隠れることによって、その真価が理解できるものがある」ことの提示となる。

このように、択一構造をとる章段においては、かならずしも集合の代表性を述べるのではなく、その背後に働く、主題に対する人の見解について示唆をうながすように事例提示が行われていると考えられる。ただ1つを選択することは、その集合に含まれる他の多くの要素を選択しないことを意味する。その集合において、大事なことは何か、その命題への誘導である。

### 3.2. 並列構造

「は」型の多くの章段では、複数の事例を述語として提示する。この場合には、他の要素を捨てて1つの要素を選択する前項の構造とは異なる。それゆえに、前述の(2)(3)のように事例は、見かけ上並列的な関係である。たとえば、宮仕えする女性貴族について述べる(10)のように構成される。

- (10) ◎ 女は  
 内侍のすけ。  
 内侍。

(169 段 女は)

典侍・掌侍は、ともに内侍司の次官であり、天皇に近侍する女官である。当時、活躍する女房たちは多々いたであろうが、ここでは律令に定められる正式な女官であること、管理職であることが価値となる。ただし、内侍司のトップである尚侍は外されており、実務に携わるものに限定されている。つまり、女性貴族としても、実務で力を発揮することが価値であり、そして、その価値が公式に地位として認められることが魅力であると述べるものであろう。

- (11) ◎ 星は  
 すばる。  
 彦星。  
 タづつ。

- △ よばひ星すこしをかし。  
 ▲ 尾だになからましかば、まいて。

(236段 星は)

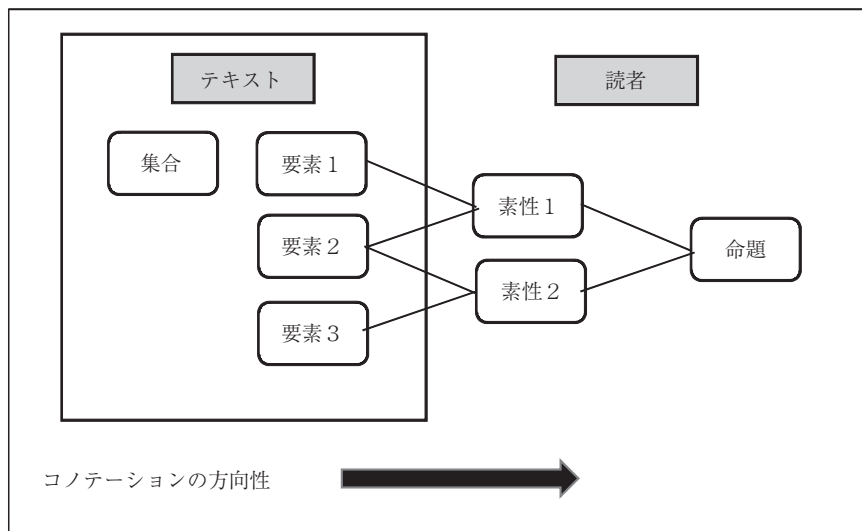
(11)では夜空の星について述べる。「すばる」は全天でもっとも明るいわけではないので、星の輝きとしては代表にはならない<sup>(3)</sup>。ただし、冬の中天に青白く星の集まりが輝くことでそれと認識できる。「彦星」は夏に見えるがやはりもっとも明るいわけではない。ただし、このアルタイル(わし座 $\alpha$ 星)は「イヌカヒホシ<sup>(4)</sup>」と称されるようにわし座の $\beta$ 星と $\gamma$ 星をともなって、やはり中天に輝く。「すばる」との共通素性はまとまった星の集団であることである。しかし、この両者は同時には見られない。冬の星と夏の星であるから、見える季節が相違する。ただし、季節ごとに現れる。ここに、「タづつ」すなわち宵の明星・金星が加わる。前2例とはちがひ、これは単独の星である。そして、これは惑星なので、すばるや彦星のように季節に応じて現れるものではない。大体半年ぐらいで宵の明星と明けの明星が切り替わる。このように並べることで、季節による安定した出現を見せる星(恒星)と、季節に依存しないで出現する星(惑星)が対比的されていることがわかる。

清少納言が星座や星の見かけではなく、出現度合いに着眼していることは、後続の注釈的成分から保証される。「よばひ星」というのは「尾」があるので彗星のことである<sup>(5)</sup>。これは不定期であるが、肉眼で尾が見えるくらいであるから相当明るいものである。「すこしをかし」と評価するポイントは、恒星や惑星とちがひ不定期に現れることであろう。「尾だになからましかば」と言うように、尾を引いていなければ普通の星と肉眼ではかわらないはずであり、そうであれば「まいて」とあるように、恒星や惑星と同じ見かけで出現の不定期性が際立つと述べるものである。

このように、(11)は星の運行の定期性と不定期性が主張される章段なのであるが、事例の連鎖によって、「星」という集合に属する要素に内在する法則性を指摘するのである。見かけ上は並列的であるが、要素間に内在する素性をコノテーション的に集約できるよう、配列されている。「すばる」と「彦星」によって、星の集団性・出現の安定性が示されたところに、「タづつ」を加えることで、集団性が排除され、恒星と異なる出現規則が対立概念として提示される。さらに、「よばひ星」を付加することで、出現周期の不定期性が補強される。このように、要素の積み重ねによって、具象的な事物からそれらが成り立つ素性が抽象される。結果、章段主題を超えて、自然の法則には必然的なものと偶然的なものがあることが導かれるわけである。



【図1】「は」型章段の情報構造



### 3.3. 「は」型章段のコノテーション

「は」型章段では、章段主題は事物の「集合」である。述語となる名詞述語文はその集合の「要素」である。集合に含まれる多くの要素の中から、単数、複数の要素が卓立的に選択される。

他の要素を選ばず、ある要素を選択することには意味があり、その集合の素性を表出することになる。ただし、ある事物のもつ素性は複数ある。要素を複数重ねることで、共通素性または対立素性が明確になる。読者は、それを考えることで、清少納言の用意した1つの命題を受容することになるのである。これを図式化すると、【図1】のようになる。

「は」型章段は、集合から要素を卓立することで、要素の素性の解析を要求する。情報の構造としては、集合→要素が言語形式として明示されるが、要素が内包する素性から命題を形成する、内向きの方向性を有する。

## 4. 「もの」型章段の情報構造

### 4.1. 共通素性

「もの」型章段において、章段主題と事例は、内包と外延の関係を形成する。この関係性は、「は」型章段とは正反対である。たとえば、次の(12)の場合、「つれづれなるもの」という章段主題は、「所さりたる物忌」以下の事例にとっ

(46)

ては、その事例の素性として内包されるものである。

(12) ◎ つれづれなるもの

○ 所さりたる物忌。

○ 馬おりぬ双六。

○ 除目に司得ぬ人、家。

△ 雨うち降りたるは、まいていみじうつれづれなり。

(133段 つれづれなるもの)

「所さりたる物忌」は、自分の家から他所に移って物忌みにこもるものであるから、何もすることがない退屈がともなう。双六で「馬(コマ)」を盤上に戻すことができないでいる状況は、ゲームは進行するもの自分は何にもできないでいる状況となる。いずれも、「つれづれ」という退屈さは内包するものの、同じカテゴリーに属するものではない。まして、「除目に司得ぬ人、家」となると、たしかに「つれづれ」という評価はあたるかもしれないが、なにゆえ、前2つの事例と並ぶのか、疑問が生ずるのであろう。それは、「この事例はどのようなまとまりなのか？」という、要素を包含する集合に注意を誘導することになる。

(12)では最後に、待っている男が来ない女の気持ち(△)を注釈的に付与することによって、その集合が「期待するものが得られない心境が生ずる場面」であると、帰結するのである<sup>(6)</sup>。すなわち、共通素性から出発して、事例の列挙によって、事例を包含する集合をコノテーションとして指向する構造である。

なお、この構造については、すでに渡辺実(1981)が指摘するところである。渡辺は「すまじきもの」章段を例題としてこれを次のように解説する。

(13) 文章の型としては、歌枕類聚風の章段と本質的に変るところがない。

違いは

すまじきもの

という形で示されるのが、以下に列挙される

昼ほゆる犬

春の網代

などの全項目への共通述語である、点だけであって、〈中略〉。これら類聚的章段において清少納言は、「すまじ」といった判断をまず固定しておいて、その判断に該当する事項を、項目として羅列してゆく  
(p. 132 下線藤原)

藤原(2018)では、「もの」型章段の名詞述語文の構造を論ずる上で、「すさまじきもの」を「共通述語」とすることはできず、それは「章段主題」であると主張した。しかし、「羅列」される「項目」に対して意味的に「共通素性」であることは認められる。そして、列挙される項目が、その素性をもつ「その判断に該当する事項」である。

ただし、本稿では、「は」型章段との対比から、それが「羅列」ではなく、コノテーションとして集合概念を指向する方向性をもった文章であることを再定義する。

#### 4.2. 直列構造

「は」型章段では、15章段が1つの事例による択一構造をもっていたが、「もの」型章段では、1つの名詞述語文で構成される章段は、次の(14)ただ1つである<sup>(7)</sup>。

- (14) ◎ 言ひにくきもの
- △ 人の消息のなかに、よき人の仰言などのおほかるを、はじめより奥まで、言ひにくし。
  - はづかしき人の、物などおこせたる返事。
  - △ 大人になりたる子の、思はずなる事を聞くに、前にては言ひにくし。

(106段 言ひにくきもの)

この章段では、名詞述語文(○)による事例提示が1つなのであるが、前後の形容詞述語文(△)が特徴的である。ともに、「人の消息のなかに、よき人の仰言などのおほかる」「大人になりたる子の、思はずなる事を聞く」と名詞述語文としても表出可能である。

ただし、前者は「よき人の仰言」を「全部読み上げる」のがはばかられるのであって、部分だけならば問題はない。そして、後者は「本人を前にして」はばかられるが、本人以外ならば「言ひにくし」とはならない。形容詞述語文を使用して、注釈的に条件表示をしているものであり、情報としては3つの事例の連鎖となるものである。

よって、これを例外的な文章処置と見るならば、「もの」型章段は原則的に複数の事例で構成されると定義できる。そして、その事例の意味は、事例の連鎖が生み出す文脈によって決まる<sup>(8)</sup>。形式的には渡辺の言う「羅列」であるが、情動的には断続的な線状性があり、直列的な文章構造を形成するのである。

次の(15)は言語が社会的に異なることを述べる章段である。事例と事例の関

(48)

係性によって意味が発生するしくみがあることを明らかにする。

(15) ◎ 同じことなれども聞き耳ことなるもの

○ 法師のことば。

○ 男のことば。

○ 女のことば。

□ 下衆のことばには、かならず文字あまりたり。

(4段 同じことなれども聞き耳ことなるもの)

まず、「法師のことば」とあるが、「聞き耳ことなる」とある以上、比較する対象が必要であることが明かである。次に「男のことば」とあるので、男性僧侶のことばと男性官僚のことばが異なる、と理解される。そして、「男のことば」は次の「女のことば」とも異なる。男性貴族と女性貴族ではことばが異なるのである。

最後に「下衆のことば」については「文字あまりたり」と清少納言が言うのは、「聞き耳ことなる」つまり、音声レベルの差違ではなく、語彙・文法レベルで違っていることの指摘である。「下衆」の比較対象は、貴族にほかならない。この指摘を受けると、各事例のコノテーションに一定の指向性が与えられる。ことばの差違を生み出すのは属する社会の違いであるから、それぞれの差違は次のような指定を受ける。

(16) 聖界と俗界

男性と女性

貴族と庶民

世界は1つでありながら、2つに分割されているのである。法師は俗人ではないから法師であり、俗人は法師ではないから俗人である。同様に、男がいるから女がいて、女がいるから男である。そして、庶民がいるから貴族がいて、貴族がいるから庶民である。すなわち、この事例は、2つの異なるものが相補的な関係をなす、1つのものであることを導くものである。通常は、デノテーション的に示される「ことばの差違」を意識するが、コノテーション的には「人間として1つ」であることを主張するものである。

「男のことば」は単独では、「男性がしゃべることば」というだけの意味であるが、事例の連鎖によって「法師に対する男」「女に対する男」という意味が付与され、その文脈的意味の総合によって、命題が形成されるのである<sup>(9)</sup>。

なお、(15)は形式的には、事例の羅列であり、並列構造としてとらえること

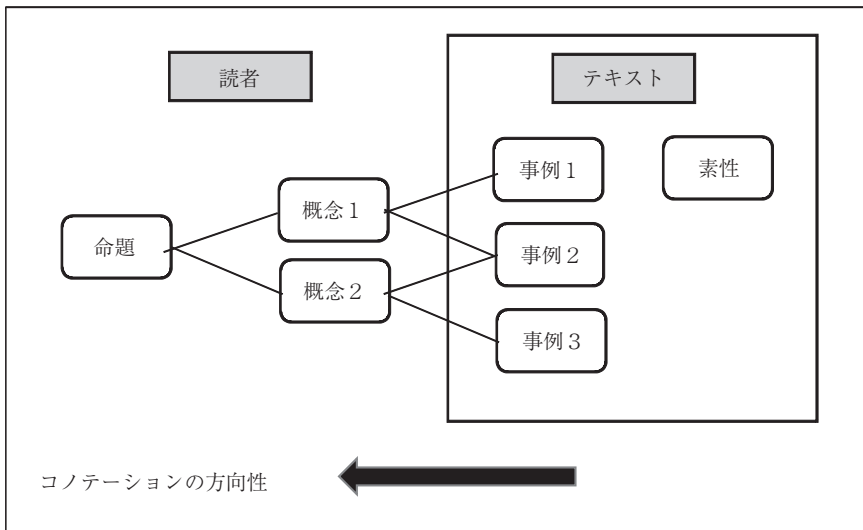
もできる。その場合、この章段の意味するところは「同じことばでも、社会属性・性別・社会階層によって異なる」という事実の指摘である。間違いとは言えない。ただし、それは社会の中で生活していると、誰でも知っている事実であり<sup>(10)</sup>、まったく新奇性はない。あえて、読者とすでに共有している情報を卓立するからには、そこから新たな情報が生成されるからである。「もの」型章段では直列構造が卓越する。

たとえば、217段「大きにてよきもの」では、「家。餌袋。」とはじまるのであるが、末尾は「山吹の花。桜の花びら」と結ぶ。山吹の花は小さいことが特徴である。桜の花、それも、その花びらはごく小さい。これで章段を締めくくることができるのは、ここにいたる文脈において、大きさが心の余裕をもたらすこと、そして、想定よりも大きいだけでそれは実現されることが明らかになっているからである。事例の連鎖によって断続的ではあるが直列的な線状性が潜在するのである<sup>(11)</sup>。

#### 4.3. 「もの」型章段のコノテーション

「もの」型章段では、章段主題は事物の「共通素性」である。述語となる名詞述語文はその素性をもつ事例である。ただし、上記のように、事例自体のデノテーションは明確な線状性を見せない。事例と事例の関係性から概念が形成される。その集積によって、その概念をまとめる「命題」が形成されるのであ

【図2】「もの」型章段の情報構造



(50)

る。これを図式化すると、【図2】のようになる。

「もの」型章段は、共通素性をもつ事例の連鎖から概念を形成する。その概念から事例を総合する1つの命題が形成されるのである。情報の構造としては、素性→事例が言語形式として明示されるが、事例と事例が形成する概念から命題を形成する、外向きの方向性を有する。

## 5. 類聚的章段の情報構造

「は」型章段と「もの」型章段は、コノテーション指向の文章であることは共通する。そして、1つの命題に向かって収斂するタイプの文章であることも共通する。ただし、その情報の方向性は対極的である。

(17) 「は」型章段は、集合概念を章段主題として提示し、内包する要素を列挙する。この選択と配列から、読者は共通素性あるいは対立素性を抽出し、1つの命題を形成する。

「もの」型章段は、共通素性を章段主題として提示し、その素性を包含する事例を列挙する。その連鎖の文脈から読者は概念を形成し、総合して1つの命題を形成する。

両者には共通の枠組みがある。類聚的章段で列挙される事例・事物は、現実存在する「現象」である。そして、現象を包括する「集合」があり、また、現象にはそれぞれ「素性」が内包される。モデル化すると【図3】となる。この枠組みにおいて、「は」型章段は外から内への向きをもち、言語形式上は空項となっている「素性」を求める読みを要求する。「もの」型章段は内から外への向きをもち、言語形式上は空項となっている「集合」を求める読みを要求するのである。

類聚的章段の伝達内容がコノテーションにあることを、清少納言は定型性に

【図3】 類聚的章段の情報構造



よって保証しているのであるが、その定型性は、読者すなわち当時の知識階層において、わざわざ指定されなくても理解できるものであったのに相違ない。文章としてのひな形があるはずである。

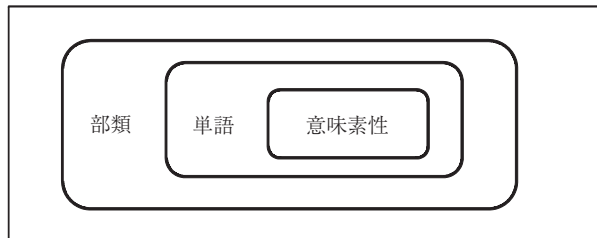
藤原(2019)(2020)では、この構造が字書の構造と基本的に同じであることを指摘した。たとえば、『和名類聚抄』は「類聚」とあるように「物尽くし」的性格<sup>(12)</sup>をもつ百科的な字書である。文字そして言語を部類に分け、各項目の形式と意味を解説する。「赤子」という項目は(18)の通りであるが、これを分解すると(19)のような構造である。

- (18) 赤子 老子注云赤子不害物[和名知子]今案云含乳之義也  
 (『和名類聚抄』巻2 [ ]内、割注。)
- (19) [集合①] 人倫部  
 [集合②] 老幼類  
 [単語] 赤子  
 [素性①] 老子注云赤子不害物  
 [素性②] [和名知子]  
 [素性③] 今案云含乳之義也

「人倫部」は「男女類、老幼類、工商類、漁獵類、微賤類、乞盜類、父母類、伯叔類、兄弟類、子孫類、夫妻類」の11類によって構成される。そして、そのうちの「老幼類」には「翁、古老、耆宿、媪、負、髻髮、総角、童、偃子、赤子、嬰兒」の11単語が並ぶ。そして、「赤子」は『老子注』の典拠、漢語に対する和語「ちご」の提示、「今案」に導かれる源順による語源、この3つの単語の意味素性から構成される。

これをまとめると【図4】となるが、字書の情報構造が【図3】と同じ構造となっていることが明かである。字書は、この構造体の羅列である。同様に、類聚的章段は、事物・事例すなわち、現象の羅列である。

【図4】 字書の情報構造



字書は、一次的には単語を対象とした解説の集積体であるが、一定の手続きで単語を部類に整理する作業と、単語自体を一定の手続きで解説する作業によって成立するものである。ある集合概念のもとに要素を選択し配列する作業は、「は」型章段のテキストの構成に相当する。

逆に、素性の方から見るならば、「赤子(ちご)」の前後の「和名」を追うと「童(わらは)」「侘子(わらはべ、をのわらは、めのわらは)」「嬰兒(みどりこ)」とあり、「幼」を共通素性とする単語が並ぶことになる。このように、ある共通素性をもつ事例を配列する作業は「もの」型章段のテキストの構成に相当する。

類聚的章段の基本構造、すなわち定型性は、字書の基本構成を利用したものであると考えられる。それは、漢文を読み、字書を利用した当時の教養階層の者ならば、当然の常識となる文章構造である。

## 6. おわりに

『枕草子』類聚的章段の情報構造は(17)にまとめた通りであるが、「は」型章段と「もの」型章段は、共通の構造をもつ。その定型性は字書に由来するものであり、集合概念から現象を列挙するタイプと、意味素性から現象を列挙するタイプの対極性をもつ。ただし、字書は言語的意味(デノテーション)によって構成されるテキストである。清少納言は、文章構造を型を借りつつ、コノテーションとして命題の伝達を行う独創的な文章スタイルを構築している。

コノテーションは場と文脈によって形成されるものであるから、対話的な構造と文脈的な意味解釈を要求することになる。しかし、特に指定がない場合には、読者の理解は拡散する。そのため、清少納言は、あらかじめ定型的な情報構造を用意し、一定の線状性を与えるのである。これによって、読者が一定のコノテーションを生成することができるテキストを実現したのである。

### 【注】

- (1) 「逢坂。鈴鹿。くきた。…」とすると、東へ下る配列となるが、京から西に位置する「須磨」を割り込ませることで、方角に関する意味素性を除去する。
- (2) 「此ノ敷タル薦ノ上ニ土器ヲ以テ関伽ヲ奉ル。鉢共ニ五穀ヲ高盛テ居ヘタリ。」(『今昔物語集』14-44)に見られるように、基本的な仏具が選択されている。
- (3) 「すばる」プレアデス星団は、3等星～5等星の集まりである。同じ星空に1等星アルデバランやシリウス、ベテルギウスなどがあり、明るさとしては地味である。
- (4) 「牽牛 爾雅註云牽牛一名何皞[和名比古保之又以奴加比保之](『和名類聚抄』巻1)。アルタイルは1等星だが、対となる「織女(ベガ)」やデネブの方がより



- 明るい。誰でも知っていて、物理的に目立たない星を選択している。
- (5) 「彗星弥長、此変異前跡不吉云々」(『小右記』寛仁2年6月29日)とあるように、尾を引く星として古記録にしばしば見られる。ハレー彗星が989年に現れて永延から永祚に改元されている。尾があるから不吉なので、それがなければ他の星と同じと清少納言は考える。
- (6) 藤原(2016)。
- (7) 藤原(2019)。
- (8) 藤原(2018)。
- (9) 「もの」型章段の命題形成の方法については、藤原(2017)にまとめた。
- (10) 「もの」型章段の名詞述語文は、著者と読者の共有情報として提示される。ただし、それは共有する知識の中から選択しているものである。常識でも代表でもないものの卓立は、選択意図の推論に読者をむかわせる機構をつくる。
- (11) 藤原(2018)。
- (12) 大槻信(2019)は『和名類聚抄』について「このような「物尽くし」を含むように、二十巻本はより実用百科事典的である」と解題する。

#### 【資料】

松尾聡・永井和子(1997)『新編日本古典文学全集(18) 枕草子』小学館  
 馬淵和夫・稲垣泰一・国東文麿『新編日本古典文学全集(35)今昔物語集(1)』小学館  
 京都大学文学部国語学国文学研究室(1977)『諸本集成倭名類聚抄(本文篇)』臨川書店

#### 【データベース】

国立国語研究所「日本語歴史コーパス」<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>  
 国立国語研究所「日本語史研究用テキストデータベース—二十巻本和名類聚抄[古活字版]」<https://textdb01.ninjal.ac.jp/dataset/kwrs/>  
 東京大学史料編纂所「古記録フルテキストデータベース」<http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>

#### 【参考文献】

川上徳明(1966)「枕草子「もの」型文の構造—その成立過程を通して—」『国語学』64  
 渡辺 実(1981)『平安朝文章史』東京大学出版会  
 藤原浩史(2014)「『枕草子』の論理形成—潜在的論理と対話的構造—」ドイツ語文法理論研究会『エネルギー』39  
 藤原浩史(2016)「『枕草子』における章段主題の述語反復」中央大学人文科学研究所編『文法記述の諸相Ⅱ』中央大学出版部  
 藤原浩史(2017)「『枕草子』の命題形成」『中央大学国文』60、中央大学国文学会  
 大槻 信(2019)『平安時代辞書論考 辞書と材料』吉川弘文館

(54)

藤原浩史(2018)『『枕草子』の対話的な文章構造』高田博行・小野寺典子・青木博史編『歴史語用論の方法』ひつじ書房

藤原浩史(2019)『『枕草子』「もの」型章段の文章構造』中央大学文学部『紀要』123

藤原浩史(2020)『『枕草子』「は」型章段の文章構造』中央大学文学部『紀要』125  
(ふじわら ひろふみ 本学教授)